

美和町文化財調査報告書

しぶ くま つみ いし づか
渋前積石塚



1995

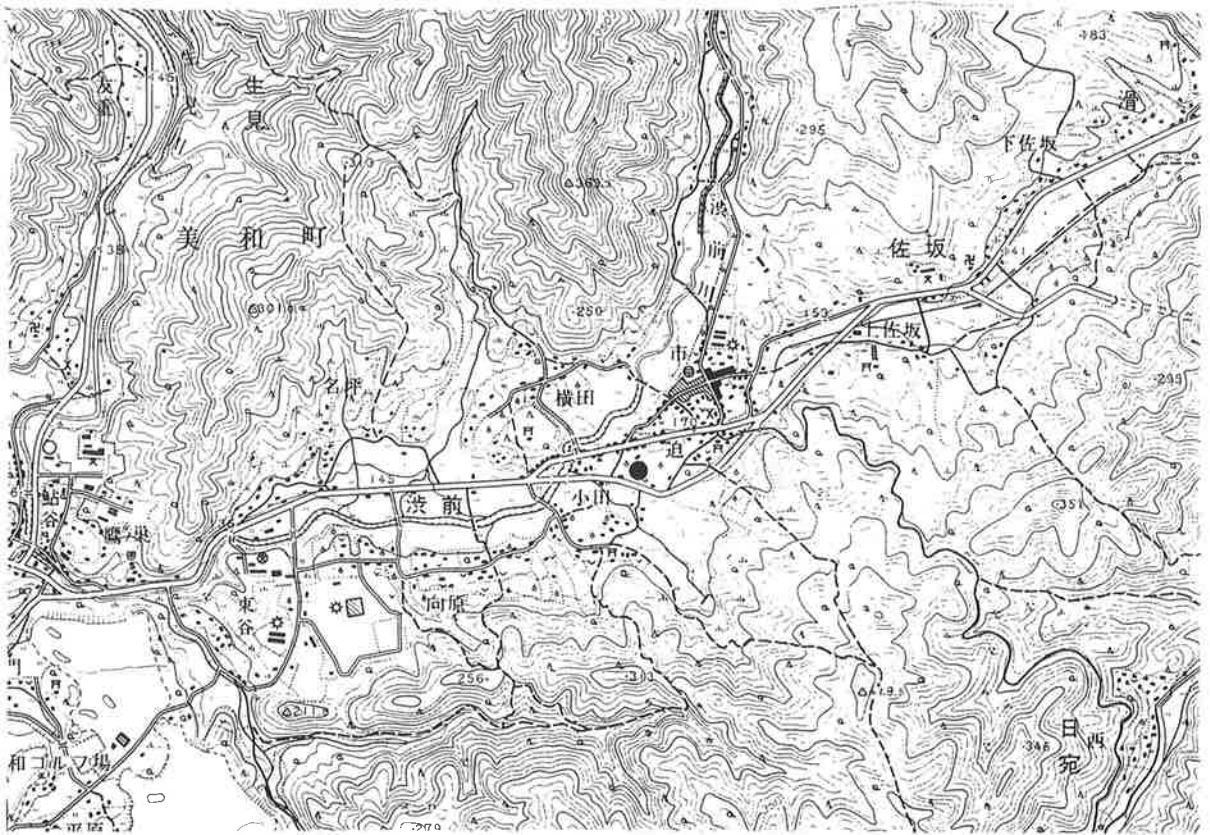
美和町教育委員会

位置

鷹巣^{たかのす}から市^{いち}の集落を過ぎて弥栄^{やさか}大橋に抜ける県道添い、洪前の県道左手の丘陵の先端に一基の積石塚がある。かつて『美和町史』の中で、巻頭写真で紹介されたものだ。

長径6.5メートル・短径4.2メートルの南北に少し長い楕円形で、下方から見ると見掛けの高さが、2メートルほどある。

周辺は畑や果樹園などに利用されていて、特に石ころが多く転がっているわけではない。したがって、こぶし大から人頭大の石で積み上げられているこの塚は、一見して何時の頃か何かの目的で人工的に塚状に積み上げられたものであることが推測できる。



積石塚

一般に土をもって塚を築く「土塚（つちづか）」に対して、石礫をもって塚を築いたものを「石塚」あるいは「積石塚」と呼ぶ。

日本の考古学では、古墳時代に築かれた「積石塚の古墳」のことを指して「積石塚」と呼ぶのが一般的な使い方であるとされている。したがって考古学の辞典などでは、初めからそのつもりで解説しているものが多い。この種のものとしては、例えば香川県高松市に所在する「石清尾山古墳群（いわせおやまこふんぐん）」（国指定史跡）などが著名である。

しかし上述したように積石塚は、石をもって塚を築いたものであるから、必ずしも古墳時代には限られないし、また埋葬の跡だけというものでもない。山口県の奈良時代の埋葬遺跡である萩市見島の「ジーコンボ古墳群」(国指定史跡)は、積石塚の群集墳としてはあまりにも有名である。岡山県の「熊山遺跡」は、埋葬の遺跡ではなく、祭祀遺跡として知られている。

積石塚は上に述べたとおり、「何かの意図を持って人為的に」塚状に石を積み上げたものであるので、そのような行為は時代を問わず行なわれているが、作られた塚に意味を持つものと、結果として塚になったものとは、おのずから区別されねばならない。つまり田や畑を開墾していく過程で、邪魔になった石礫を一か所に集めた場合、結果として人為的な塚が現出するが、これらは積極的に遺跡の範疇に入れるかどうかは難しい。

普通この種のもは遺跡の対象から外されることが多いが、それでも弥生人が初めて農耕を開始し田や畑を切り開いていった時期の所産であったり、縄文人が石器を作る過程で材料とした石や、要らなくなった石を一か所に積み上げたような場合、それは遺跡ではないときめつけるにはいささか抵抗もある。

積石塚と言っても一言では言い表わし難い多種多様なものがあることをまず考えておく必要がある。



石清尾山北大塚(香川)



見島ジーコンボ古墳群(山口)



熊山遺跡(岡山)



▲発掘前の積石塚(東から)



(西から)

渋前の積石塚

渋前所在の積石塚は、一見古墳の形態に近い。

こぶし大から人頭大の大きさの自然石を平面・円形（実際は楕円形）に不規則に積み上げ、マウンド状を成す。南側のマウンドの端にはまるで小規模な横穴式石室の入り口を連想させるような石組が見られる。したがってこれを「積石塚の古墳」と考える人がいても不思議ではない。あるいはそう考えられていたことが、今日までこの塚を現状のままで遺存させてくれたのかもしれない。

今回の発掘調査は、この塚の性格を明確にしようとして企画されたものであった。

調査はまず、塚が立地する地形の測量をすることから開始された。（図1）

塚の発掘は、保存を第一に考え、石積をすべて除去せずに、塚の中心から東側のみ上部からできるだけ水平に取り除く。その過程で内部の施設あるいは遺物が認められるかどうかを慎重に観察していく。

石の積み方・用い方に変化が見られないか、石の大きさに変化が見られるか、時代を示す遺物が発見されないか。

墳頂部下約1メートルで地山層に達する。この間上部には比較的大きな石礫が積まれていて、地



▲発掘前の積石塚



▲石組み露出部分

山の直上には礫を多く含む褐色の土の層が認められる。(図2)

内部には特別に施設らしいものは認められない。

積石の墳丘の南側に、まるで横穴式石室の入り口のように見えていた石組も、2個の支石と、その上に渡すように置かれた平な蓋石以外には奥へはつづいていない。

積石のマウンドの中には全く何も認められなかった。

積石を掘り進む過程で、石の間から数十点の陶器の破片と、わずかに年代の手掛かりとなる銅銭「寛永通宝」1枚が出土した。

出土状況には規則性がなくまたまとまりが見られない。また個体としてのまとまった器種もない。ただ破片のみである。

陶器の種類は、日常雑器と呼ばれる播り鉢・灯明皿・手あぶり火鉢・茶碗などの類が多い。ただ



▲積石塚出土品

しそのほとんどが江戸時代に属する。

もっとも古い時期のものは、室町時代の終頃(16世紀後半)の刷毛目茶碗と壺の破片であった。たった1片だけ、須恵器の破片が混入していた。時期は定かではない。近辺の地に古代の遺跡が眠っている可能性もありそうである。直接この積石塚と関係するものではない。

江戸期に属した陶器の破片も、その大部分が幕末に近い18~19世紀のものと思われる。ただしこれら一連の出土品の中に、明治以降の遺物の混入がないことは、この塚が作り終えられた時期が、江戸時代およびそれ以前であったことを証明する。

寛永通宝の存在もこれと矛盾しない。

積石のマウンドの中心線上での断面の観察では、この塚の築かれていった過程が解る。

当初石が積まれてあったのは、マウンド南側に築かれた蓋石を載せた祀堂と思われる施設の周辺



▲東半部を取り除いた積石塚の断面



▲発掘範囲

である。この時はこの祀堂を中心として径1～1.5メートル程度の円形の石積であった。まずは祭祀の場として村の人によりここに祀堂が設けられていたのであろう。

そののち畑や果樹園などの開墾とともに、まさに邪魔になる石をここに持ち寄り、祀堂を隠すことのないようその背後に積みあげることの繰返しが、いつの間にか今日見られる大きな積石状のマウンドを形成するに至ったものと思える。

後半の行為がある種の信仰の延長線上にあるのかどうかについては、はっきりとしたことは解らない。

ある種の信仰がつづいて、この積石塚の形成につながったのだとしたら、祭器に関する遺物が遺されていてもよいが、これを示すものはない。

ただし、もともとこの場所が祭祀の場であったということは当然意識されていたと思えるので、遺物からは積極的に証明できないが、全くありえなくはない。

江戸時代も終りに近づくにつれて、飢饉や疫病で村々は疲弊し、水枯れや、蝗害に悩まされた記録は多い。江戸時代の農村では、その度に祭祀を行ない、命を落とした村人のための供養を執り行った。そのような時ごとにここに石礫を持ち寄り積みあげていった可能性は否定できない。その結果が大きな積石塚となったと推定することは無理なことではないとも思える。



▲石組み部分



▲正面より

千人塚・供養塚と呼ばれるものの大半が、江戸期のこうした村人の所産である事実から推すと、これらもその一つである可能性は強い。

「渋前の積石塚」として、地元の歴史を伝えるささやかな遺跡として、この後も保存されていくことを期待したい。

調査は、美和町教育委員会が主催して、平成6年4月18日から一週間実施された。

発掘の技術的な援助は、山口県埋蔵文化財センターが行なった。

発掘には地元の人達の参加をいただいた。調査期間中は、多くの人達の見学があった。

新聞社の取材もあり、美和町としては、小規模ながら埋蔵文化財の発掘調査という数少ない機会を得ることとなった。

これを一つの契機として、町内に眠る多くの先人たちの歴史を知ることのできる遺跡の調査が計画的に実施されていくことを、期待したい。

(文責 山口県埋蔵文化財センター 中村徹也)

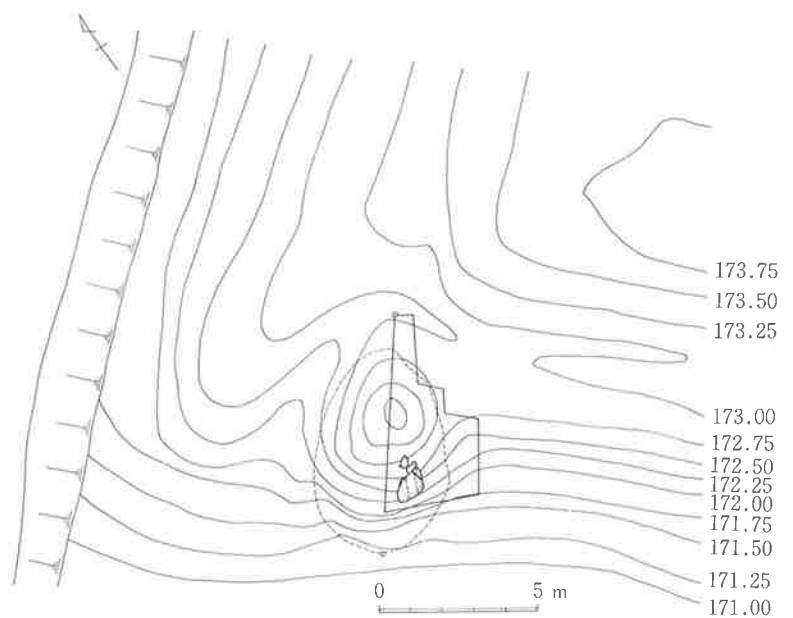


図1

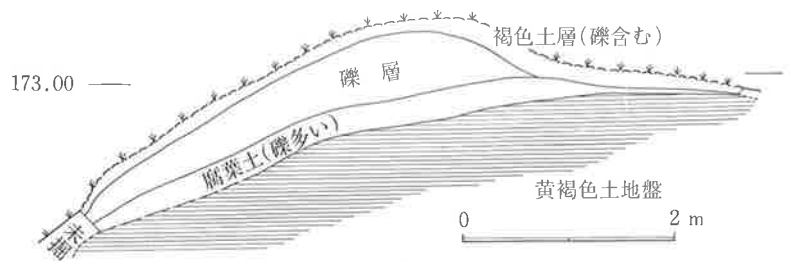


図2

積石塚の調査にあたって

美和町字迫の積石塚は、昭和60年ごろ発見されたものであり、これは「戦国末期の武将の墓」とか「単の畑の石を積み上げたもの」などといわれ、正体不明の塚でありました。しかし地元には「この塚にさわると罰が当たる」「粗末にするとたたりがある」などという伝承もあり地元の人々による祭事はずっと続けられていました。

平成6年4月、山口県教育委員会により発掘調査をして頂いた結果、「18世紀後半の供養塚の可能性が高い」というご判断をいただきました。この時代、町内の他地域では、人口1/3から1/4が、餓死したという記録も残っており、調査結果のご判断で長い間の謎を解明して頂きました。

おわりに、山口県埋蔵文化財センター、山口県教育庁文化課の先生方、地元の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

美和町教育委員会 教育長 野村 龍雄

美和町文化財調査報告

渋前積石塚

1995年3月発行

編集 山口県埋蔵文化財センター

発行 美和町教育委員会
(玖珂郡美和町大字生見2171-2)

印刷 泉菊印刷株式会社
